

様式第 2 (第12条関係)

加入国際学術団体に関する調査票

1 国際学術団体活動状況 (内規第 11 条 活動報告)

団体名	和	国際地理学連合
	英	International Geographical Union (略称 IGU)
	団体 HP (URL)	https://igu-online.org/ (日本学術会議が加盟していることの記載 有 ・ <input type="checkbox"/> 無)
国際学術団体における最近のトピックについて (学術の進歩、当該団体の推進体制の変化、国際機関・政府・社会との関わり方等)		IGU は 2022 年までの活動目標として次を掲げており、これらが最近の主要なトピックとみなせる。 1) 世界と地域の持続的発展、生活の質の改善、経済の近代化、社会の正義、環境のセキュリティに関連する国際的研究の推進と、それに基づく計画立案。 2) 生物多様性と文化の多様性の保護、自然遺産と文化遺産の保全、地理学と環境に関する教育、地理学的知識の普及に関連する国際的支援体制の構築。 3) 地理学と他の地球科学や社会科学の諸分野との連携の強化 4) 地理学の自然的側面と社会的側面の統合的な活用 5) 最新の ICT の手法の適用、データベースの活用、科学技術との統合といった地理学の手法の高度化 6) 国際もしくは各国の行政組織に地理学の考えを普及し、社会やビジネスと関連した意思決定を支援
政策提言や世界の潮流になりそうな研究テーマ・研究方式・研究助成方式等について		政策提言とそれに関連する今日的な研究に関して、国際的な組織や活動母体と積極的に連携している。たとえば国際協働研究プラットフォームの Future Earth には計画の初期から深く関与しており、国連の防災部門や「持続可能な開発目標 (SDGs)」との関係も強い。これらに対応した研究は、砂漠化、温暖化、食糧問題、人口問題、自然災害といった多岐にわたる内容を含むが、40 の分野別の研究委員会 (コミッション) を擁する IGU は、多様な研究を同時に推進できる体制を持つ。最近は複数の委員会が連携することも多く、連携で行われる国際会議に対して IGU が助成する制度も設けられている。
日本人役員によるイニシアティブ事項や日本からの参加によって進展や成果があったものについて		IGU の現在の会長は日本人の氷見山幸夫氏 (北海道教育大学名誉教授、日本学術会議元会員、現連携会員) であり、2016 年 8 月より 4 年間の任期で IGU を牽引している。氷見山氏は 2010 ~2016 年は副会長であり、その際にもアジアからの IGU への貢献の強化などを進めた。また、IGU の研究委員会のうち、Climatology と Hazard and Risk の二つで日本人が委員長を担当している。
加入していることによる日本学術会議、学会、日本国民への変化やメリットについて		日本学術会議には第一部の地域研究委員会と、第三部の地球惑星科学委員会に、地理学と関連した分科会が設置されている。また、第二部の環境学関連の分野で連携会員となっている地理学者も複数いる。したがって、世界の地理学を代表する組織である IGU に日本学術会議が加入していることは、同会議

様式第 2 (第12条関係)

	<p>全体の国際性の向上に貢献している。また、日本学術会議の加入により、IGU に対応する日本国内委員会の権威、信頼性、代表性が高まっているため、地理学に関連した国内の諸学会と連携するハブとして積極的に活動することができる。地理学は日本国民にとっても基礎的な素養であり、2022 年度からは高等学校で地理が必修化されることもあり、地理学への期待が高まっている。IGU との連携を通じて国際水準の地理学の内容を国民に伝達することは重要であり、日本学術会議の協力が不可欠である。さらに地理学や IGU に関連した一般人向けのシンポジウム等を日本学術会議の講堂などで実施しており、その成果を「学術の動向」で公開するといった活動も行われている（たとえば 2018 年 4 月のシンポジウム「文理融合科学から持続可能な未来を考える―世界への日本の貢献―」と、同名の特集記事を含む「学術の動向」2018 年 7 月号）。</p>
<p>その他（若手研究者・女性研究者育成法、科学者の倫理に関する当該国際学術団体の基本方針や憲章、資金提供ソースの発掘における画期的な方策等の特記事項など）</p>	<p>IGU は若手の育成や支援に積極的であり、高校生を対象とする国際地理オリンピックを毎年主催しており、日本を含む 40 ヶ国以上が参加する行事として定着している。大学生や大学院生を含む若手の研究者の育成についても、IGU は専門のタスクフォースを設置しており、国際地理学会議の開催時には 20～30 名の若手に参加旅費を補助するといった活動も行っている。女性や性的マイノリティに関する課題についても、40 の研究委員会の一つに「ジェンダーと地理学」があることに象徴されるように、IGU は以前から積極的に取り組んでおり、執行部や研究委員会のメンバーを選ぶ際にもジェンダーバランスが考慮されている。</p>

2 今後の予定について (内規第 11 条 活動報告)

<p>総会、理事会の日本開催の予定について（招致等の予定も含め）</p>	<p>2013 年に IGU の京都国際地理学会議を開催したばかりなので、現在は大会の招致活動は行っていない。一方、2018 年 4 月には役員会を東京に招致し、会議、学士会館でのリセプション、東北地方の巡検などを行った。このため、次の役員会の招致については 5 年程度後に検討する予定である。</p>
<p>日本人の役員立候補等の予定について</p>	<p>前記のように 2020 年まで日本人が会長であるが、それ以降にも日本人が役員になることが望ましいので、立候補をする方向で検討を行っている。</p>
<p>現在、検討中の日本からの提言や推進するプロジェクト等の動きについて</p>	<p>IGU では近年アジアの存在感が高まっており、現在は会長が日本人、事務局長がインド人である。また、アジアの大半の国が参加する「アジア地理学会」が 2018 年 12 月に発足した。日本はアジアの主要国として、この種の活動に積極的に関与している。また、2019 年 7 月に東京で開催される国際地図学会議は、学術会議の IGU 分科会の下に設置された ICA 小委員会が主導し、IGU 分科会および IGU 本体も支援している。たとえば 2018 年 7 月の IGU ケベック国際地理学会議では、東京での国際地図学会議の宣伝を行うブースを設置した。</p>

様式第 2 (第12条関係)

3 国際学術団体会議開催状況 (内規第 11 条 活動報告)

総会・理事会・各種委員会等の状況 (過去 5 年間及び今後予定されているもの)	総会開催状況	2016 年 (開催地: 北京)、 2020 年 (開催地: イスタンブール)、 2022 年 (開催地: パリ)		
	理事会・役員会等開催状況	2013 年 (開催地: 京都)、 2014 年 (開催地: モスクワ)、 2014 年 (開催地: クラクフ)、 2014 年 (開催地: ケープタウン)、 2015 年 (開催地: シカゴ)、 2015 年 (開催地: モスクワ)、 2016 年 (開催地: デリー)、 2016 年 (開催地: 北京)、 2016 年 (開催地: パリ)、 2017 年 (開催地: アムステルダム) 2018 年 (開催地: 東京)、 2018 年 (開催地: ケベックシティ)		
	各種委員会開催状況	IGU には 40 の研究委員会と 3 つのタスクフォースがあり、それぞれが年 2 回程度の会議や研究集会を開催しており、その際に委員会の活動に関する会議も開催される。		
	研究集会・会議等開催状況	IGU 国際地理学会議の実施状況 2013 年 (開催地: 京都)、 2014 年 (開催地: クラクフ)、 2015 年 (開催地: モスクワ)、 2016 年 (開催地: 北京)、 2018 年 (開催地: ケベックシティ) さらに研究委員会やタスクフォースが開催する集会や会議が頻繁に行われている。		
上記会議等への日本人の参加・出席状況及び予定	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2013 年国際地理学会議 (京都)、日本人参加者 600 名 ・ 2014 年国際地理学会議 (クラクフ)、日本人参加者 80 名 (代表派遣 1 名、氷見山幸夫) ・ 2015 年国際地理学会議 (モスクワ)、日本人参加者 60 名 (代表派遣 2 名、氷見山幸夫、春山成子) ・ 2016 年国際地理学会議 (北京)、日本人参加者 120 名 (代表派遣 1 名、氷見山幸夫) ・ 2018 年国際地理学会議 (ケベックシティ)、日本人参加者 60 名 (代表派遣 1 名: 氷見山幸夫) 			
国際学術団体における日本人の役員等への就任状況 (過去 5 年)	役職名	役職就任期間	氏名	会員、連携会員の別
	会長	2016～2020	氷見山幸夫	(20-24 期) <input type="checkbox"/> 会員・ <input checked="" type="checkbox"/> 連携
	副会長	2010～2016	氷見山幸夫	(20-24 期) <input type="checkbox"/> 会員・ <input checked="" type="checkbox"/> 連携
	災害とリスク研究委員会 会議長	2016～2020	小口 高	(21-23 期) <input type="checkbox"/> 会員・ <input checked="" type="checkbox"/> 連携
気候学 研究委員会 会議長	2016～2020	松本 淳	(21-22 期) <input type="checkbox"/> 会員・ <input checked="" type="checkbox"/> 連携	

様式第2 (第12条関係)

	災害とリスク研究委員会 会議長	2008～2016	春山成子	(21-23期) <input checked="" type="checkbox"/> 会員・ <input checked="" type="checkbox"/> 連携
	持続的農業システム研究委員会 会議長	2012～2016	金 科哲	() 期) 会員・連携
	政治地理学 研究員 会議長	2012～2016	山崎 隆	() 期) 会員・連携
出版物	1 定期的 (年 4 回) 主な出版物名 IGU e-Newsletters 2 不定期 () 主な出版物名			
活動状況が分かる年次報告等があれば添付又は URL を記載 (https://igu-online.org/annual-reports/)				

4 国際学術団体に関する基礎的事項 (内規第3条、4条、5条)

国内委員会 (内規4条第3号)	委員会名	IGU 分科会
	委員長名	小口 高
	当期の活動状況	(開催日時 主な審議事項等) ・2017年12月18日 第1回分科会 委員長・幹事選出、活動方針、3つの小委員会設置、公開シンポジウム、2018ケベック会議 ・2018年4月9日 第2回分科会 副委員長選出、地名問題、地理オリンピック、公開シンポジウム、2018年ケベック会議 ・2018年7月23日 第3回分科会 2018年ケベック会議、地理オリンピック、小委員会報告、WSSF2018会議 ・2018年11月19日 第4回分科会 地名問題、2018年ケベック会議、地理オリンピック、2019年国際地図学会議 ・2019年12月27日 第5回分科会 トルコ大会、地理オリンピック、地名委員会、小委員会活動報告 ・2020年3月18日 第6回分科会 トルコ大会、地理オリンピック、小委員会報告、GeoNight2020Japan 企画 ・2020年9月14日 第7回分科会 IGU 動静、地理オリンピック、小委員会報告、GeoNight2020Japan、次期への引継ぎ
内規第3条 (国際学術団体の要件)	国際学術交流を目的とする非政府的かつ非営利的団体である <input checked="" type="checkbox"/> 1. 該当する 2. 該当しない ※根拠となる定款・規程等の添付又は URL を記載 (https://igu-online.org/organization/statutes/)	
	各国の公的学術機関及び学術研究団体等が国際学術団体に国を代表する資格を有して加入するものが、主たる構成員となっている (主たる構成員が、いわゆる「国家会員」であるか否か)	

様式第 2 (第12条関係)

<input checked="" type="checkbox"/> 1. 該当する 2. 該当しない ※根拠となる資料の添付又は URL を記載 (https://igu-online.org/organization/statutes/#statute2)	
下記の事項 (ア～エ) のいずれか一つに該当するか (該当するものに○印) ア 個々の学術の専門分野における統一かつ世界的な組織を有するもの <input checked="" type="checkbox"/> イ 研究の領域が複数の専門分野にわたるものであって、統一かつ世界的な組織を有するもの ウ 研究の領域が複数の専門分野にわたるものであって、ア又はイの国際学術団体を連合した世界的組織を有するもの エ 構成員のうち、各国代表会員がアジア地域等我が国が関係する地域等に限られるものであって、当該国際学術団体の研究の領域が複数の専門分野にわたるもの	
10 ヶ国を超える各国代表会員が加入している <input checked="" type="checkbox"/> 1. 該当する 2. 該当しない	
加入国数及び 主要な各国代 表会員を 10 記載	(97 ヶ国)
	・各国代表会員名／国名 Yukio Himiyama (Japan), RB Singh (India), Vladimir Kolossov (Russia), Joos Droogleever Fortuijn (Netherlands), Elena dell’Agnese (Italy), Iain Hay (Australia), Fu Bojie (China), Michael E. Meadows (South Africa), Barbaros Gönençgil (Turkey), Nathalie Lemarchand (France)